H28地域協働研究（地域提案型・後期）

RT-12「被災博物館（山田町立「鯨と海の科学館」）の再開支援と住民参加に関するモデル構築」

課題提案者：一般社団法人山田町観光協会
研究代表者：総合政策学部　平塚　明
研究チーム員：沼崎真也（山田町観光協会）、湊　敏・道又　純（鯨と海の科学館）

＜要　旨＞

山田町立「鯨と海の科学館」は寄贈されたばかりの海藻標本の大半を3.11の津波で失った。本研究では新たに大型海藻標本を作成し、レスキュー標本の里帰りと合わせて「大型海藻標本展」を開いた。また、町民から選んだ数人について個人史と町の歴史や自然環境との関わりを表現した「山田にんげん百景展」も開催した。いずれも、被災後に再開した鯨館への、町民による支援のあり方を探ろうとする試みである。

1　研究の概要（背景・目的等）

山田町立「鯨と海の科学館」(以下、鯨館)は2011年３月11日の津波により、大きな被害を受けた。マッコウクジラの骨格標本はほぼ無事だったが、展示のもう一つの柱である海藻押し葉標本８万点のほとんどが流失した。吉崎誠博士(東邦大名誉教授)が日本有数のコレクションを寄贈した直後の悲劇であった。しかし、震災直後から行われた救出作業で押し葉標本1万点が回収された。傷んだ標本の修復は、吉崎博士自身および国立科学博物館、岩手県立博物館によっておこなわれ、現在も保管されている。この作業途上の2011年９月、吉崎博士は急逝された。

長らく休館していた鯨館は2017年７月に再開したが、展示収蔵物の絶対的な不足という問題を抱えたままの再出発となった。鯨館はまた、震災以前から入館者数の減少に悩まされていた。復興の遅れている山田町において、地域文化の中心としての鯨館の価値を高めることは極めて重要である。また、地域の博物館として、住民参加の具体化も新たな課題となっている。

2　研究の内容（方法・経過等）

鯨館の再開を支援するために、二つの企画展と関連イベントを実施する。

1　大型海藻標本展。美しい大型海藻標本により館の展示の魅力を高めるとともに、コレクションを充実させる。

2　山田にんげん百景展。町民から選んだ人たちの個人史を表現したパネルと、その人にかかわる「もの」を展示する。最終的には百人を目指し、その集合から地域の歴史や風土が読み取れるように全体を構成する。

いずれの企画や作製過程、運営にも住民が深くかかわる。これからの地域博物館における住民参加モデルを作りながら進める。

3　これまで得られた研究の成果

2017年７月15日に再開した「鯨と海の科学館」において、二つの企画展を実施した。

1　「海中の森 ― 山田の海藻」(大型海藻標本展) 2017年11月８日～ 2018年１月31日

標本にする海藻の採集段階から市民参加を予定していたが、地域や学校行事との関係から、館スタッフのみがおこなった。採集地は山田湾沿岸や湾内の大島(オランダ島)である。また、コンブの採集については漁協の協力を得た。標本作成教室を2017年８月26日と10月29日に開催し、市民が参加した。大型海藻に対応するためB0サイズのベニヤ板、段ボール板、台紙や展示パネルを用意した。海藻を洗った後、台紙上に丁寧に展開し、サラシ布、吸水紙、段ボール板で挟んで重ねた後、一番上のベニヤ板に重石を乗せた。扇風機で一週間以上通風した。乾燥を確認後、額装した。

企画展に先立って2017年11月５日、記念講演会「山田の海藻 ― 豊かな海、日本海との繋がり」を開催した。演者は吉崎博士とともに山田湾などの海藻研究に尽力して来られた神戸大学内海域環境教育研究センター鈴木雅大特命助教である。また、企画展には国立科博と岩手県博から保管しているレスキュー標本の一部を貸し出していただいた。

2　「山田にんげん百景展」2017年10月５日～ 2018年１月31日

第一期として四人の町民についての展示をおこなった。それぞれ行政、建設業、卸売業、漁業に携わる人物にインタビューし、個人のライフヒストリーと地誌との関わりについての文章と写真を、一人一枚の大型パネルに表現した。また、個人の思い出の品も展示したが、津波に度々襲われてきた当地では、「もの」が残りにくいことを痛感した。「みんな流されてしまった」という言葉を何度も聞いた。被災地あるいは災害常襲地における博物館活動の難しさは、本研究の発見の一つである。

「山田にんげん百景」のパネルは鯨館の展示終了後、岩手県立図書館で2018年３月１日から24日まで、特別展示「写真で振り返る東日本大震災」の一部として公開された。

4　今後の具体的な展開

二つの企画において、予定していた住民参加は不十分だった。博物館の管理がかつての指定管理者制度から委託管理に変更になった影響も大きかった。

海藻標本については、鯨館の受け入れ体制が整えば、各地で保管中のレスキュー標本が本格的に里帰りする。しかし、館内の常設展示用には新たに標本を作る必要がある。一方、生きた海藻・海草の展示も試みる価値がある。大型海藻は難しいが、小型のものを水槽で生育・維持すれば鯨館の展示のもう一つの核となり得る。

5　その他（参考文献・謝辞等）

謝辞

企画展の開催に当たってご協力いただいた、岩手県立博物館（鈴木まほろ様）、国立科学博物館（北山太樹様）、さんりく山田漁業協同組合、岩手県立図書館に感謝申し上げます。

図１　海藻の採集（オランダ島）

図２　市民も参加して海藻標本を作製した。

図３　記念講演会

図４　山田にんげん百景展のパネルの一枚（編集・コピーライティング・撮影　髙橋正也、アートディレクション　村上由美子）

図５　大型海藻標本